

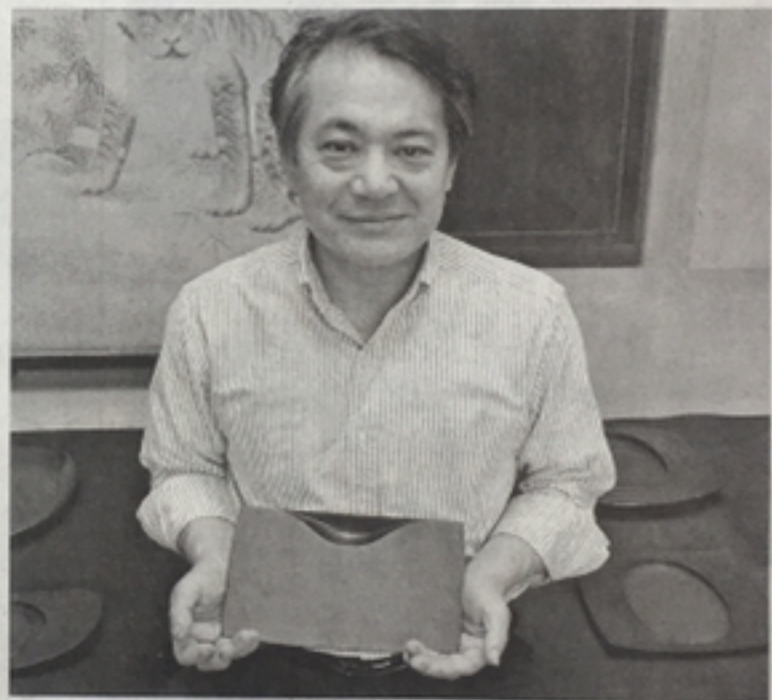


2月に国民栄誉賞を受賞した将棋の羽生善治竜王(47)と、囲碁の井山裕太棋聖(28)に記念品として贈られた、畿南地域の伝統工芸品「雨畑硯」を制作した。

制作依頼は今年1月、内閣府から電話であったという。授賞式まで約1か月しかなく、スケジュールは厳しかったが、「大変光栄なこと。雨畑硯をアピールするためにも最高の硯を作ろう」と引き受けた。2人の偉業にふさわしい将棋の駒と碁盤をかたどったデザインを考案し、約3週間で作品を仕上げた。

1690年(元禄3年)から約330年続く「甲斐雨端硯本舗」の13代目。雨畑硯の起源は諸説あるが、初代の雨宮孫右衛門が身延山参詣の途中に、富士川支流の早川の河原で見つけた黒一色の石

国民栄誉賞 記念の硯制作



作品を手にする雨宮さん

「甲斐雨端硯本舗」(富士川町)の13代目で硯作家

雨宮 弥太郎 さん 57

で硯を作ったことが始まりと言われている。硯は徳川将軍家に献上されるようになり、その名が全国に広がっていった。

子供の頃から家業を継ぐことを意識してきたが、東京芸大では彫刻を学び、現代美術に傾倒していたという。20代後半になり、芸大の先輩から

展示会の出品作品として硯を勧められて制作。「難しくなйдらうと思って作ったが、満足はいく作品ができず、歯がゆい思いをした」。このことがきっかけとなり、本格的に硯制作に取り組みようになった。

まずは古典的な硯を参考に制作を始めた。経験を積み重

ねたことで、イメージ通りの作品を形にできるようになり、日本橋三越本店や東京のギャラリーでは個展も開催。花びらの形をしたものや脚の付いた硯など、伝統を生かしながらも現代的で斬新なデザインが話題を呼んだ。

早川町雨畑で採れる黒石は、石の粒子が均一で墨をするのに適しており、雨畑硯は品質の高さで知られる。「硯は精神の器。情報があふれる現代では、墨をする時間は自分と向き合う瞑想の時間にもなる」と語る。

だが、産業として栄えていた昔に比べて今は受注が減り、雨端硯本舗にかつていた10人ほどの職人も今は2人が残るだけだ。「これから先も生き残っていかけるのか」。危機感強い。

最近の子供たちにも硯に親しんでもらおうと、小学校で硯や墨を使って遊ぶワークショップを行っている。「伝統をつないでいくことが大切。いい作品を作ることほもちろん、雨畑硯にもっと関心を持ってもらえるようにアピールを続けていきたい」

(松本健太郎)